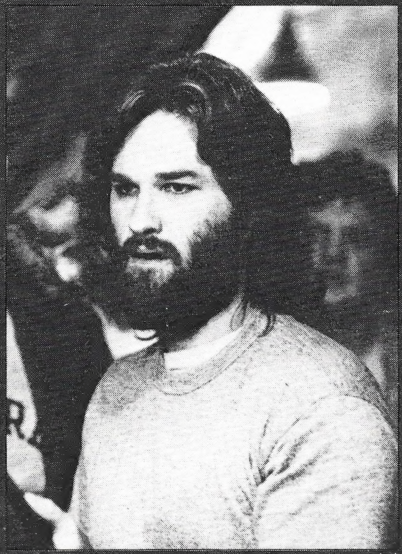
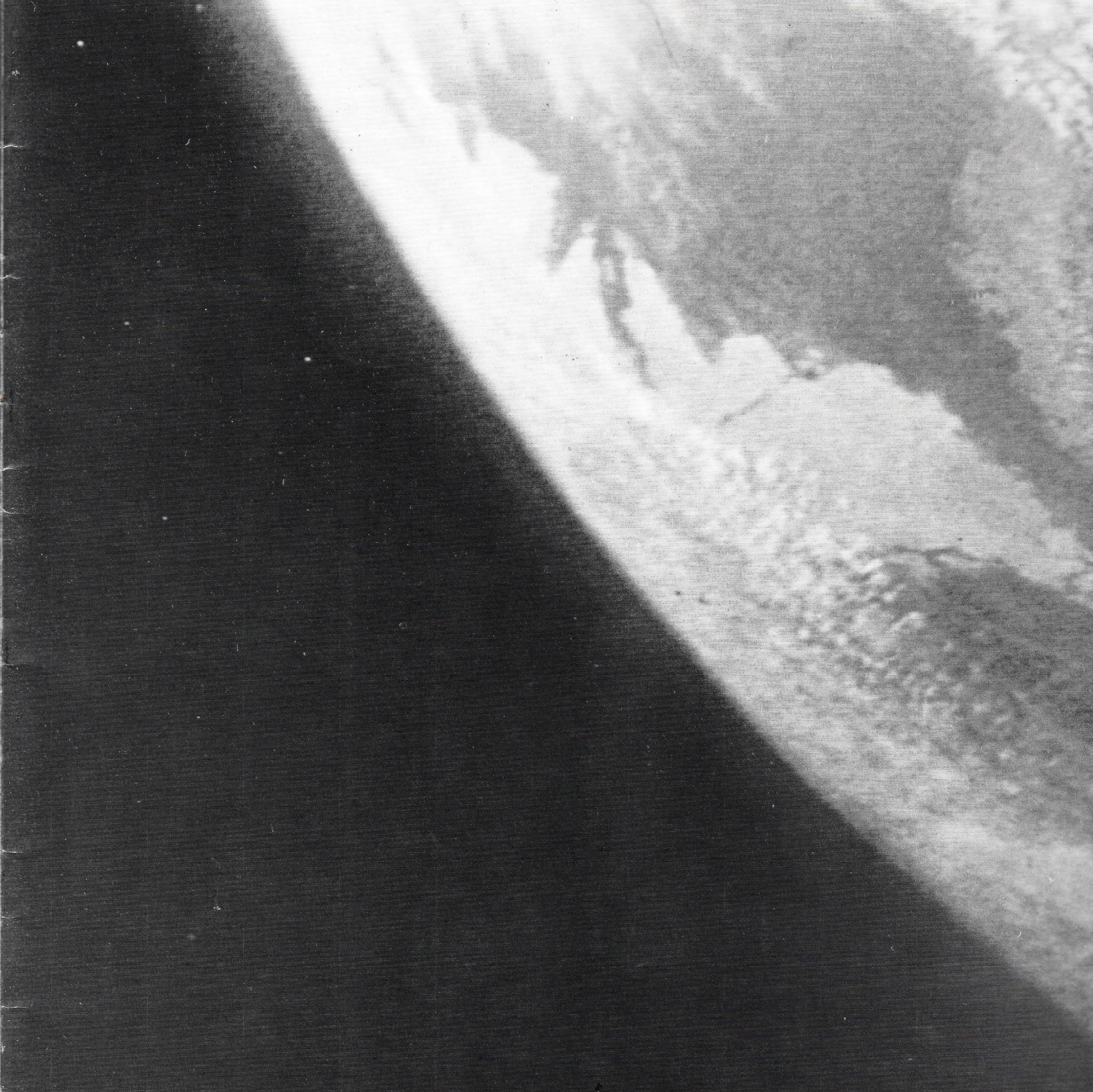

遊星からの物体X
スカラ座


JOHN CARPENTER'S
THE THING
MAN IS THE WARMEST PLACE TO HIDE.











テクニカラー／パナビジョン

遊星からの物体X

CIC配給・ユニバーサル映画作品

解　説

1938年，ジョン・W・キャンベル・ジュニアが，発表したSF「影が行く」＝“WHO GOES THERE？”は，当時の米文学界に強烈なショックを与えた。地球外生物による侵略テーマのクラシックとして，それは完璧なまでの構成とショック度を具えていたのだ。

1951年，巨匠ハワード・ホークスがこれを「遊星よりの物体X」THE THINGのタイトルで映画化。いまなおＳＦファンに熱狂をもって迎えられている。

そのホークス作品に，いま，まったく別の角度からアタックしようという男が現れた。４歳の時に観たホークス作品に魅せられ，以来，リメークの宿願を抱いてきたというその彼の名はジョン・カーペンター。「ハロウィン」「ザ・フォッグ」「ニューヨーク1997」でニュー・ショッカーの鬼才と目される存在。原タイトルは同じく，“THE THING”。しかし，これは単なるリメークではなく，原作により忠実な初めての映画化だ，とカーペンターは強調する。

1982年冬の南極大陸。アメリカ南極観測隊マクマード基地の本隊から遠く離れた第四基地。そこに詰める12名の隊員に，突然の恐怖が襲いかかる。

発端は，10万年前に地球に激突した巨大ＵＦＯを発見したノルウェー隊の行動。ところが，厚い氷の中には，地球人類の及びもつかない恐るべき生命が息づいていたのだ。いともたやすく狙いをつけた人間や動物の体内に侵入し，そのものに同化する謎の物体X。ノルウェー隊はたちまち全滅の憂き目にあい，いま，その侵略径路はアメリカ基地へ——。絶体絶命の環境下で逃げ場を失った男たちを襲う絶望的恐怖。だが，パニック状態の中で次第にリーダーシップをとり始めたタフなヘリコプターパイロットだけは，人類の叡智をかけて物体に闘いを挑んだ——！

ホークス版との決定的な差異でもあり，この作品に見事な風格・大作感を与えているのは，何よりも物体つまりエイリアンのドギモ抜く映像化だ。デザインしたのは，



「ハウリング」の狼男ワンカット変身シーンで唸らせた名手ロブ・ボッティン。これに視覚効果が「大地震」「ヒンデンブルグ」のオスカー受賞者アルバート・ホイットロック，特殊効果に「ジョーズ」のロイ・アーボガストと，その道の達人がズラリ勢揃い。

製作は「おかしなおかしな石器人」のデビッド・フォスターとローレンス・ターマンの名コンビ。キャンベルの原作を類を見ないＳＦサスペンスに仕上げた脚本は，名優バート・ランカスターの息子で「がんばれ！ベアーズ」のビル・ランカスター。

カナダ／ブリティッシュ・コロンビア州，アラスカ／ジュノーに現地ロケし，南極の雪原・氷原を再現したキャメラは「ザ・フォッグ」のディーン・カンディ。さらに不気味な律動のシンセ・サウンドで恐怖感を盛りあげる音楽は「アイランド」のエンニオ・モリコーネの担当。

女っ気抜きのオール男性キャストは，カーペンターとは二度目のコンビを組む「ニューヨーク1997」のカート・ラッセルを筆頭に，「スクープ／悪意の不在」のＡ・ウィルフォード・ブリムリー，「昔みたい」のＴ・Ｋ・カーター，「ミッシング」のデビッド・クレノン，「チャンス」のリチャード・ダイサート，「天国の門」のリチャード・メイサー，「ポパイ」のドナルド・モファット，「リトル・ロマンス」のピーター・マロニーら，映画・演劇界で活躍するクセ者バイプレイヤーがそれぞれ処を得たリアルな好演を展開。

やるかやられるか人類対エイリアンの凄惨な死闘を描いて全編たたみかけるようなショック描写の連続。まさにこのジャンルの総決算的印象だ。米バラエティ紙の「劇場ロビーに看護婦を待機させておくべし」との評はまさに言い得て妙だ。

〈1982年度ユニヴァーサル映画＝ＣＩＣ配給／Ｄ・フォスター＝Ｌ・ターマン・プロ作品／パナビジョン／テクニカラー／６巻2,976ｍ／上映時間１時間49分〉



キャスト・スタッフのプロフィール



〈マクレディ〉

カート・ラッセル

ノルウェー隊の全滅を目の当たりに見，いま自国隊の仲間が次々侵略されて行く中で，マクレディの念頭をよぎるのはただ一つ，たとえ相討ちになろうと，怪物の息の根をこの場で断つことだった——。

９歳の時，ディズニー映画の子役スターとしてデビューしてから，いまタフなアクション・ヒーローに成長したカート。カーペンター監督とは「ザ・シンガー」「ニューヨーク1997」に続いてこれが三度目のコンビだ。

ディズニー時代には劇映画「グレイ・フラノを着た馬」「テニス・シューズをはいたコンピューター」や，ＴＶ「ディズニーの素晴しい世界」などによく出演。

転機は79年，ＴＶムービー「ザ・シンガー」でロックンロールの王者エルビス・プレスリーを演じた時。対象へのドラマチックなアプローチぶりで一躍注目を浴びたのだ。その後，「ユーズド・カー」でコミカルな味を見せ，カーペンターの「ニューヨーク1997」ではハードなタッチでファンを魅了。さらに最近は“The Hasty Heart”で舞台にも進出，幅広い演技派への道を歩み出したところ現在，マイク・ニコルズ監督，メリル・ストリープ共演で反原発キャンペーン・ドラマ『カレン・シルクウッド』に出演中。

私生活では，「ザ・シンガー」で共演した女優シーズン・ヒューブリーと結婚。長男ボストン・オリバー・グラントと共に親子３人ロスに住んでいる。一時プロを目指したほどの野球好き。

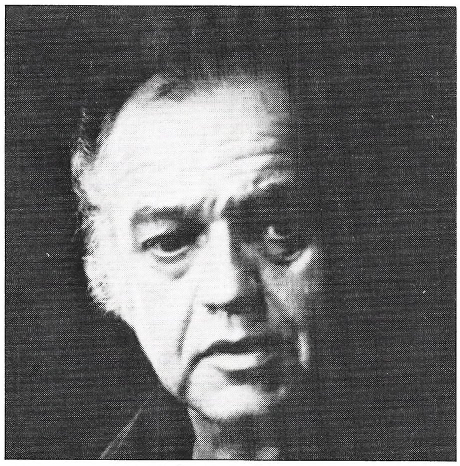


〈ブレア〉

Ａ・Ｗ・ブリムリー

12名の隊員中，ドラマ中途からもっともミステリアスな動きを見せる生物学者ブレア。果たして行動の真相は？

ユタ州生まれ。本来は蹄鉄関係の会社を経営する実業家だが，３年前，突如“チェンジ・オブ・ペース”を考えて，俳優業に入ったという変わった経歴の主。が，その後の芸歴は見事なもので，「チャイナ・シンドローム」(79)「出逢い」(80)「ブルベイカー」(80)「スクープ／悪意の不在」(82)などにアクの強いクセ者ぶりを発揮している。



〈医師コッパー〉

リチャード・ダイサート

生年月日不詳。メイン州生まれ。ボストンのエマーソン・カレッジ卒業後舞台にデビュー。ホセ・キンテーロの劇団に参加，「アイスマン・カムズ」「偽りの花園」「わが命つきるとも」などのヒット舞台で名声を博した。60年代後期からハリウッド映画に登場。玄人受けする渋いバイプレイヤーとして重宝がられている。作品は「ホスピタル」「電子頭脳人間」「イナゴの日」「ヒンデンブルグ」「民衆の敵」「メテオ」「チャンス」等多数。





〈隊長ギャリー〉
ドナルド・モファット

合衆国南極観測隊第四基地隊長ギャリー。疑心暗鬼の渦の中で，その指揮権を放棄する。

父はイギリスの名優グレアム・モファット。60年に舞台デビュー。65年にハリウッドへ向かい，「ＦＢＩ」を始め，多くのＴＶシリーズにゲスト出演。その後，74年に「ニューランド」，77年には「未知への逃亡者」にレギュラー役を得る。映画は「暗闇の約束」(79)「オン・ザ・ニッケル」(80)「ポパイ」(80)など。



〈監督〉
ジョン・カーペンター

「ザ・フォッグ」「ハロウィン」「ブギーマン」「ニューヨーク1997」とひとクセもふたクセもあるサスペンスでドル箱監督の座を築き上げたカーペンター。この「遊星からの物体Ｘ」は，初のメージャー（ユニヴァーサル）系作品ということになる。

1948年ケンタッキー州ボーリング・グリーン生まれ。小さい頃から映画好きで監督に憧れ，両親を説得して南カリフォルニア大学（ＵＳＣ）の映画科に進学。在学中，短編『ブロンコ・ビリーの復活』を製作し，これが70年度のアカデミー短編賞を獲得。さらに，初の長編『ダーク・スター』を４年掛りで完成させるなど，学生時代からすでに輝かしい映画歴を見せた。

続いて，信奉するハワード・ホークスの傑作西部劇「リオ・ブラボー」を現代版にアレンジした「第13分署の襲撃」では，監督・脚本・編集・音楽の４役をこなし，特にヨーロッパで絶賛を博した。

78年，フェイ・ダナウェイ主演の「アイズ」の脚本を執筆。

その彼に一躍名声をもたらしたのは，同じ年の「ハロウィン」で，インデペンデンド系ムービーとしては史上最高のヒットを記録。併せて，製作／共同脚本のデブラ・ヒルとのチームを確立した。

その後，ＴＶに出向き，ＴＶムービー「狙われた密室の女」を演出・脚本。この時の主演女優エイドリアン・バーボーと恋に落ち，79年１月結婚した。

続いてＴＶムービー「ザ・シンガー」でカート・ラッセルと初コンビ。その後，「ザ・フォッグ」「ニューヨーク1997」「ブギーマン」と劇場ヒットを連発して現在に至る。

いま，スチーブン・キングのベストセラー小説「ファイアスターター」と，ホークスへのオマージュ西部劇「エル・ディアブロ」を企画中。



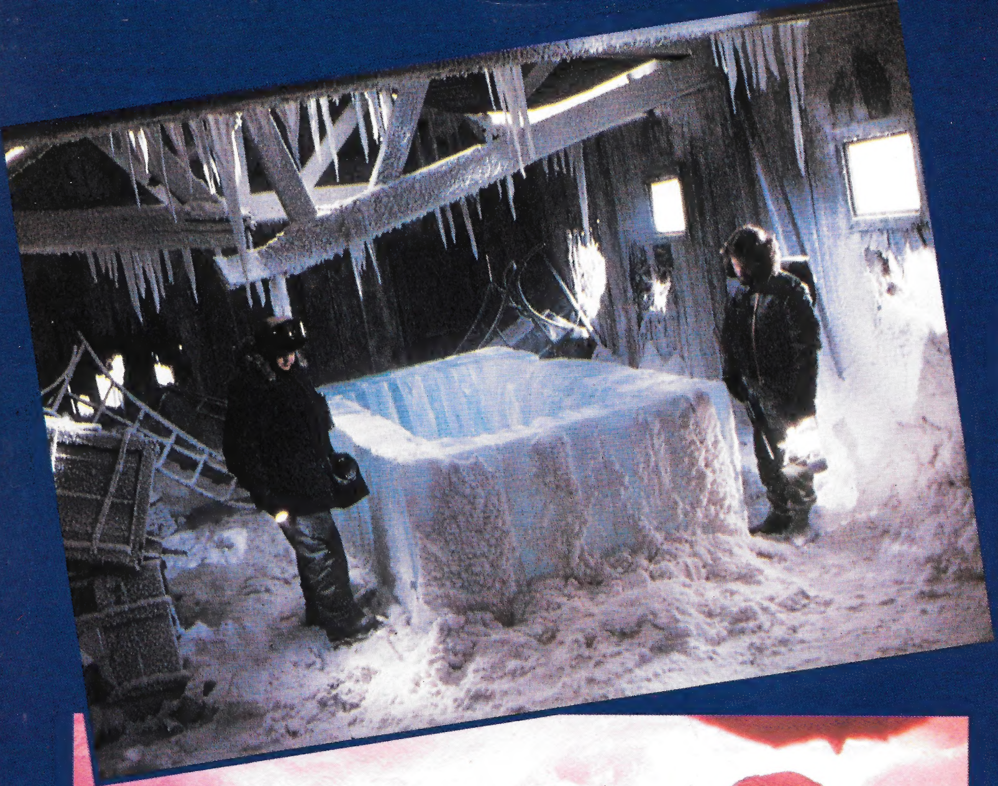
〈スペシャル・メーキャップ〉
ロブ・ボッティン

今年24歳。いまハリウッドで一番若く，ホットな仕事を見せる特殊メイクの魔術師だ。

９歳の時，自らのイマジネーションをイラスト化し，その特異な才能に周囲が注目。14歳でプロとしてデビュー。数々の低予算ホラー映画の特殊メイクを担当した。このうち，「ザ・フォッグ」では幽霊を，『ロックンロール・ハイスクール』では500ポンドの大ネズミを彼自身が“演じて”いる。

「狼男アメリカン」「ハウリング」を経てこの「遊星からの物体Ｘ」では，実際の人間の型に想像の肉片をそぎ，或いはくっつけ，最もいみ嫌われる異形の生物，例えばヘビ，タコ，クモ，カニ，深海魚などを下敷きに，怪物のイマジネーションをまとめたという。

「私は暗闇が嫌いだ。夜，ベッドのそばに映る自分の影が何より恐ろしい。この仕事にたずさわるようになった動機は，私のそんな子供のような恐怖感を解明するためだったような気がする」とボッティンは言う。









JOHN CARPENTER'S

THE THING



物　語

南極大陸1982年冬。氷と静寂が支配する極限の世界。そこは踏査をなお拒む白い魔境だ――。

突然の爆音とともに，白い岩肌から一機の軍用ヘリが姿を現し，ぬうように低空飛行を開始した。突如，機内から男が身を乗り出すようにライフルを発射した。犬だ――。どこから追いたてられてきたのか，一頭の精悍な南極犬が，ヘリの追尾を懸命にかわしてる。地表すれすれの機上から犬めがけて狂ったように撃ちまくる男。どう見ても，たわむれにハンティングしているとしか思えない。やがて，人と犬の追撃戦の舞台は，無人の境界から人気のある場所へと移動した。アメリカ南極観測隊第四基地だ。

隔絶した環境の中で，爆発寸前だった男所帯のうっ屈感は，一頭の犬の闖入によって一気に破られた。それを追って基地上空を激しく旋回するヘリコプター。突然の騒ぎに，12名からの隊員ほとんどが外へ飛び出す。コンピューターとのチェス・ゲームに退屈していた基地の雇われパイロット，マクレディ（カート・ラッセル）もその一人だった。ヘリが雪原に着陸し，飛び出した狙撃手が基地に向かって発砲した。ここでも男は，隊員たちにじゃれつく犬を確実に狙っていた。さらに男は手榴弾の使用を誤って仲間のパイロットが乗ったヘリを爆破してしまった。瞬間，振り返った男の眉間に銃弾が射ち込まれた。腕に自信の隊長ギャリー（ドナルド・モファット）の一弾だった。

騒ぎは一旦はおさまった。ヘリの国籍はノルウェーだった。ノルウェー隊の上に何が起きたのか？謎を解明すべく，マクレディは医師コッパー（リチャード・ダイサート）とともに偵察に向かった。

コバルト・ブルーの空にたなびく不気味な黒煙。ノルウェー基地は廃虚と化していた。散乱した室内に無惨に転がる隊員の死体。その死に方は尋常のものではない。地下室に奇妙なものが見つかった。浴槽状の氷のかたまり。中に漬かっていた“何か”を取り出した形跡がある。さらに，外の雪上に不気味なモノを発見した。焼却しようとして焼き尽せなかったそのモノは，ヒトかケダモノか，この世のものとは思えないグロテスクな形状をしていた。

マクレディらが持ち帰った不気味な物体は，早速コッパーや生物学者のブレア（A・ウィルフォード・ブリムリー）らによって精密にチェックされた。「内臓は完全に揃ってる。だが…」さすがの専門家たちもクビをひねるしか手はなかった。

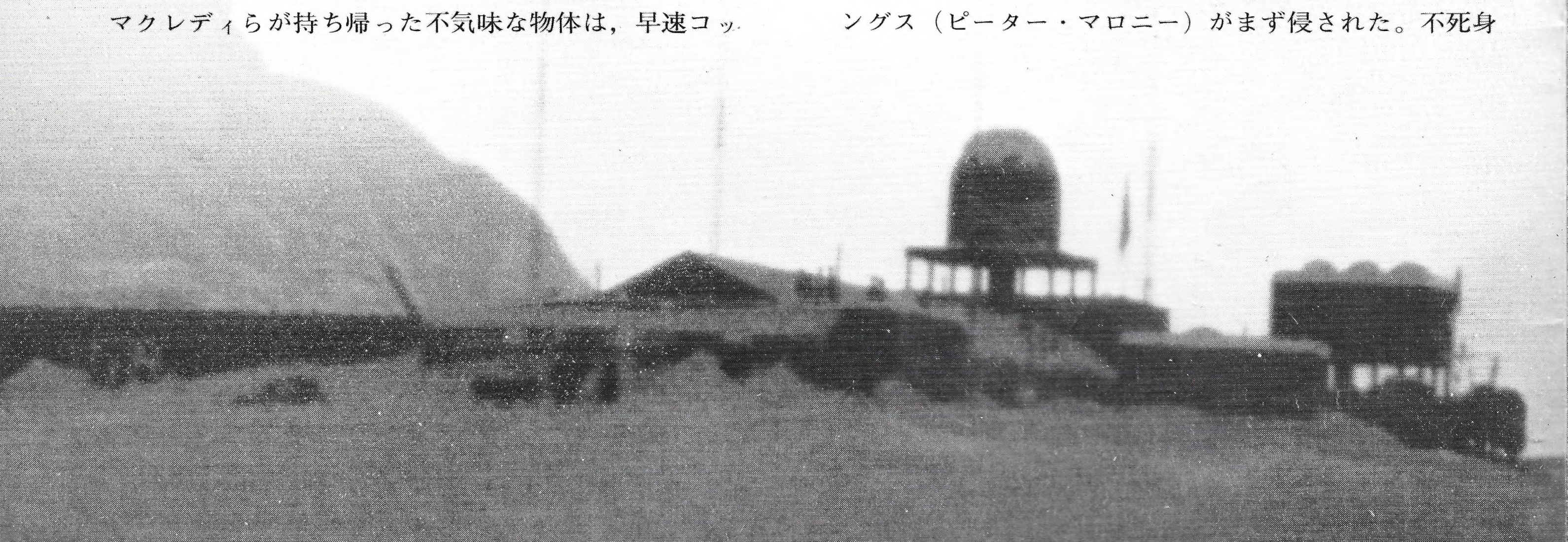
と，その時，基地内の緊急警報が発動した。異常が発生したのは犬舎だった。内部ではとてつもないことが起こっていた。あのヘリに追われて逃げてきた南極犬が，突如驚くべき変身を遂げ，犬舎の他の犬たちに襲いかかっている。頭部が割れ，内臓が張り裂け，内部から凄まじい勢いで飛び出した新たなる生命体。それが触手らしきものを四方八方に拡げ，先端から液を飛び散らしている。駆けつけた隊員チャイルズ（キース・デビッド）の足に触手の一本が巻きついた。「火だ！」咄嗟に誰かが叫んだ。マクレディが怪物に火炎放射を浴びせる。凄いジャンプ力で天井に張りつき，なお生命力を見せる物体に，さらに炎と熱波があてられる。熱が怪物のウィークポイントか？それにしても，あの南極犬がなぜこんな姿に――！

マクレディらはノルウェー基地から持ち帰った資料，マイクロ・フィルムをくまなくチェックした。ノルウェー隊は氷原踏査の過程で何かを発見したらしい。マクレディら３人の隊員が直ちにフィルム中の現場に飛んだ。

それはあまりにも巨大なＵＦＯ落下の跡だった。推定およそ10万年前。永い間の地殻変動により，今回ノルウェー隊の目にとまったらしい。マクレディは，ノルウェー基地にあった氷のかたまりを切り出したと見られる跡を発見した。そこに10万年の間氷漬けになっていたものは何か？

第四基地ではブレア，コッパーらを中心に総力を挙げて物体の解明を急いだ。南極犬。狂ったようなノルウェー隊員の狙撃。ノルウェー隊を全滅させたのが，あの犬をとりこんでいた“何か”だったのはもう疑いの余地はない。細胞か血液か，とにかく何らか接触手段によって，物体は狙いをつけた生体にすみやかに侵入し，そのものに同化する。ブレアが全データをぶち込んで試算したところ，何と２万７千時間で全世界の人類が物体に同化されると出た。だが，その時，アメリカ隊はノルウェー隊に続く第２の血祭りにあげられようとしていた――！

犬舎で抹殺したはずの物体の遺骸を監視していたベニングス（ピーター・マロニー）がまず侵された。不死身



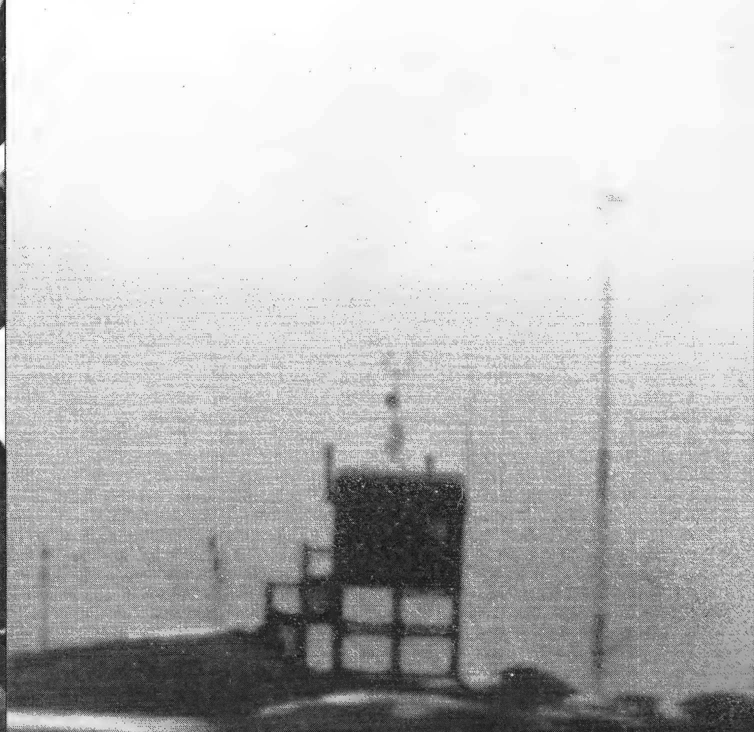
の細胞はまだ息づいていたのだ。駆けつけたマクレディらにライトで照らし出されたベニングスは，時間の関係でまだ物体の名残りを一部とどめていた。だが，手の施しようはない。非常な火炎放射が直前まで仲間だったものに浴びせられる。その時，マクレディは物体の血液が熱に異常な反応を見せることを知った。

やがて，基地内に不審な事件が続発した。何者かが，基地と外界との唯一の輸送機関であるヘリの操縦席を破壊。マクレディは直前に走り去った影を見た。さらにブレアが突然大暴れし，皆にとり押えられた。物体の恐怖に彼は狂ってしまったのか？そして，各隊員の緊急用保存血液の容器が何者かに破壊されていた。“判別”されることを恐れた物体が先手を打ったのか？

残った隊員の間に不安と疑惑が充満し始めた。血液容器破壊の疑いをかけられた隊長ギャリーが，指揮権を放棄した。ノルウェー隊の資料を克明に調べていたフュークス（ジョエル・ポリス）の死体が発見された。彼も明らかに物体にとりこまれていた。そして，直前までフュークスと一緒だったマクレディに一同の疑いが及んだ。

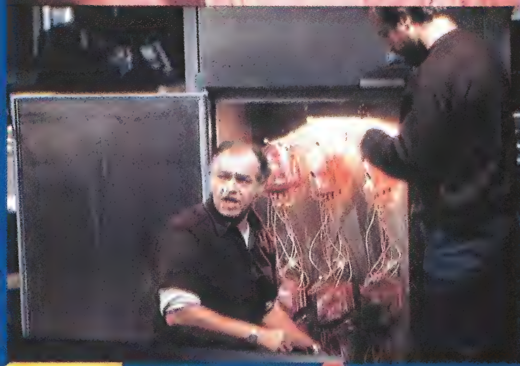
火炎放射器とダイナマイトで武装したマクレディが，一同の立てこもる娯楽室に乗り込んだ。緊迫感に耐えかねたクラーク（リチャード・メイサー）が，マクレディに牙を向き射殺された。果して彼は物体だったのか？さらにマクレディに押し倒されたノリス（チャールズ・ハラハン）がそのまま昏倒し，危篤状態に落ち入った。コッパーがノリスに電気ショックを施そうとした。突然，ノリスの胸部が口を開け，はさみこんだコッパーの両手首を食いちぎってしまった。断末魔の叫びとともに絶命するコッパー。マクレディが急ぎ胴体に向けて火炎放射する。ノリス，いや物体の首が胴から分離し，そこからはい出る幾本もの触手。ここにきて，マクレディは決意した。自分を含めて残るメンバーの血液をチェックし，物体と人間を判別するのだ。銃を持ったマクレディにいやいやながら従う隊員たち。椅子に縛りつけた彼らの後ろ手から採取した血液に，熱した針金が一つずつあてられる。物体のそれならば熱に反撃してくるはずだ。固唾をのんで見守る目，目。逃げ場のない環境下で，いま人類と遠い惑星から来た謎の物体との凄惨な闘いが始まろうとしていた——！

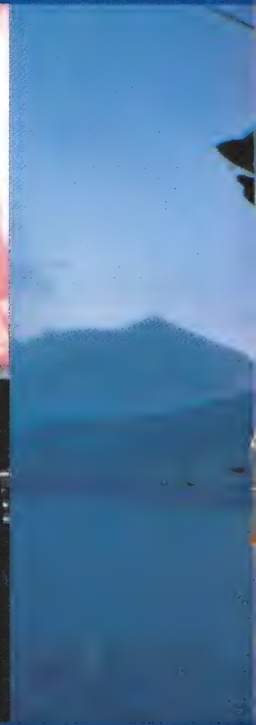












JOHN CAR

THE

TH









PENTER'S

ING

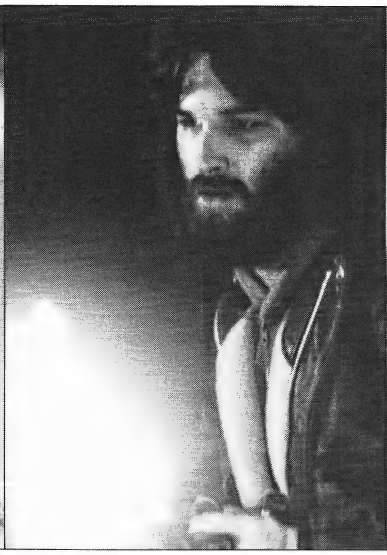






近未来，あるいは現代 起こりうる，いや，起こりつつある事態への緊急（ハイ）警戒（アラート）の予感。

「解説やらない？」「うん，やるやる！」
題名も聞かずに，ふたつ返事でＯＫした私が馬鹿だった。
「遊星からの物体Ｘってね……」。「え!?50年代のフィルム再映するの？」「いやそのリメイクでね……。」
嫌な予感はこの時走った。
「ジョン・カーペンターの……。」
がぁんっ!!出たっ，出たよ——THE THING。
忘れもしないロスアンゼルス。フィルメックス'83で湧きかえる春。ウエストウッドにハリウッド，それこそＬＡ中のありとあらゆる壁という壁，「キャットピープル」の赤く血塗られたポスターと並び，その上，その下に，ともかく無茶苦茶張りまくられていたのが，このポスターだった。
光の前に１人の男。それは異星人とも地球人ともつかぬ不気味な様相をして，背後からの「白」い強烈なフラッシュを浴びて，冷たく凍った南極の氷の「青」の中，「黒々」と浮かびあがる。その下に，血のしたたるような白文字——「THE THING」
その光景を，今でもはっきり覚えている。私はサンタモニカに住んでいて，夕刻，空の青みが藍を増し，道を行く対向車のライトに舗道の人々がシルエットになる頃，バスから降りて来る。そこだけさびれた一角で，その上どういう訳か，ベニヤの長い板塀ができた。丘に昇る道，反対車線の車のライトはまるで宙に浮くように，フッと，突然現われる。ある日それらの映した物は!?——男だ！白いフラッシュバックの数十人も，幾百人もの男。私は絶句した。そして見つめた。
それがポスターと気づくのに少し時間がかかった。ポスターの列。唐突に，何の予告もなく，数メーター，数十メーターと，私が歩かねばならぬ空へ向かう道の，その全てを侵略していた。


つねむらそのこ

その頃，あちらの映画雑誌（ムービーマガジン）では，数ページぶち抜きで寄生した異星人や裂けていく血だらけの犬，人間の内臓をぶち破る触手，逆さになった顔を引きずって動くコロイド状の血塊と——特殊撮影の粋が紹介されていた。ぱかぁと苦痛に歪んだ口の中からその舌が，まるで生きてるそのままに唇をなめ回し……。実際にこの映画の特殊効果（スペシャルエフェクト）の90%はそういうシーンに費やされたという。

だから私は，これを恐怖映画（ホラームービー）だと，あの怪物をメインにした驚怖映画（ムービー）だと思っていた。ところがどっこい……。

話は単純明解。孤立した南極基地を外宇宙からの少々荒っぽいお客様が訪問になった。そのお客様，ちょっと礼儀を欠いていて，出されてもいないお茶菓子をつまみ喰いした。素行不良！ダョ。嘔吐をそそる容姿，それだけでも罪だってんのに……。

白い雪原に１台のヘリ。ムキになって犬を追うノルウェー人（そりゃ，ムキになる！）。ところが米国南極第四基地のＪ＆Ｂ片手にピンポンなんかやってる連中には事情が良く飲み込めない。正義の味方を射殺して，悪魔の食事に自分たちをくれちまった。この辺りはまだサスペンス。が，犬がズバッ!!と裂けて正体現わした辺りから，ホラ，恐怖（びっくり）映画だ。凄いよね。あの特撮。

初めの数回は不気味な生物（エイリアン）が飛び出してくれば驚きもしたし，気持ち悪くもあった。でも，どういう訳か立て続けに見せられちゃうと恐怖が薄れちゃって。ドロドロと血のりが動いても，腹が裂けて歯が両手首を噛みちぎっても，化物に慣れちゃったからおもしろくない。びっくりするのは画面に飛び出された一瞬だけで，あとは全部どうなるかわかっちゃう。

そうなると，後半の見せ物がない。「誰が異星人かつきとめる」，それがテーマになる訳だけど。身を捨てての南極基地爆破のシーン，あれがこの映画最高のクライマックスになる予定だったけど，残念でした。撮り方が悪いのか，今時（いまどき）あれ位じゃ驚かないでしょう!?

ここで原点に戻って考えてみよう。この映画を構成する要素（シチュエーション）。外宇宙からの未知の生命体。人類の最期を予知する侵略。孤立無援の死の恐怖の中での戦い。この三つ，これだけあって，カーペンターがやったなら，もっともっとおもしろくなったろうに，物足りなかった。

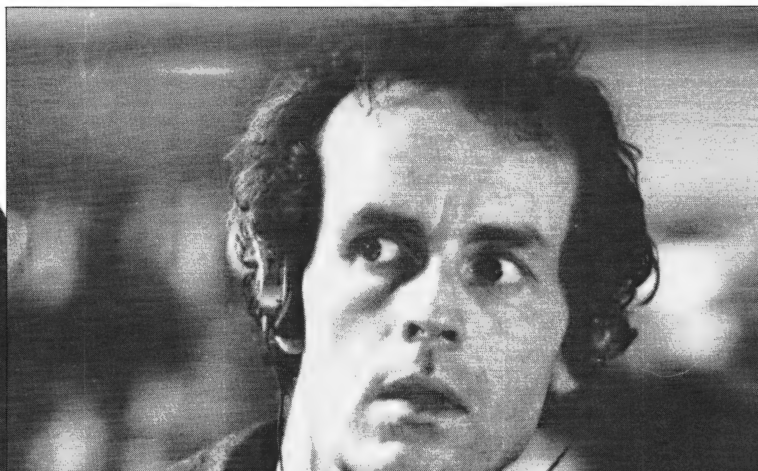
原因は，前半かなり早い時期に未知の生物が未知でなくなった事にあると思う。もっとゆっくり，あの特撮を見せれば——。だけど何故，カーペンターがそれをしなかったか？邪推するに，彼は本当は孤立した基地内でのマクレディを中心とした，互いを疑り合い，殺し合う，その「極限された恐怖の心」を描きたかったんじゃないだろうか。追い詰められた者たちの心のパニック。でも，それは伝わって来なかった。カーペンターの鋭い描写でハッとさせられるシーンは幾つもあっても，アップテンポで話が進み過ぎ，化物に気をとられているうちに，そのタッチが鈍っていった。

でも，最後の２人の会話，あれはジン！と来る。２人共人間ならば，春の救援隊を待たずに「死」しかない。が，戻って来た男が，寄生された人間ならば!?マクレディは言葉を切った，男に「どこへ行ってた!?」と訊いた後。「正体を聞いても仕方ないか，もう。なる様になるだろう」。——考えさせられる言葉。

これは，82年冬の話だった。男が，侵略者なら，覚えてるかな？コンピューターのはじき出した計算を。２万７千時間後——1,125日後，３年と30日後，地球は完全に奴らのものになる。まだ，答えは出ていないのだ。

運良く，男が人間であったとして，いつ，私たちの前に何が起きるか，全くわからない。それより，ひょっとして，私たち自身，私たち自身という意識体が，太古の昔，地球を襲い，そこに住む人間（ヒューマノイド）に寄生して，人間（ヒューマノイド）という形で進化して来た異星人だったら!?







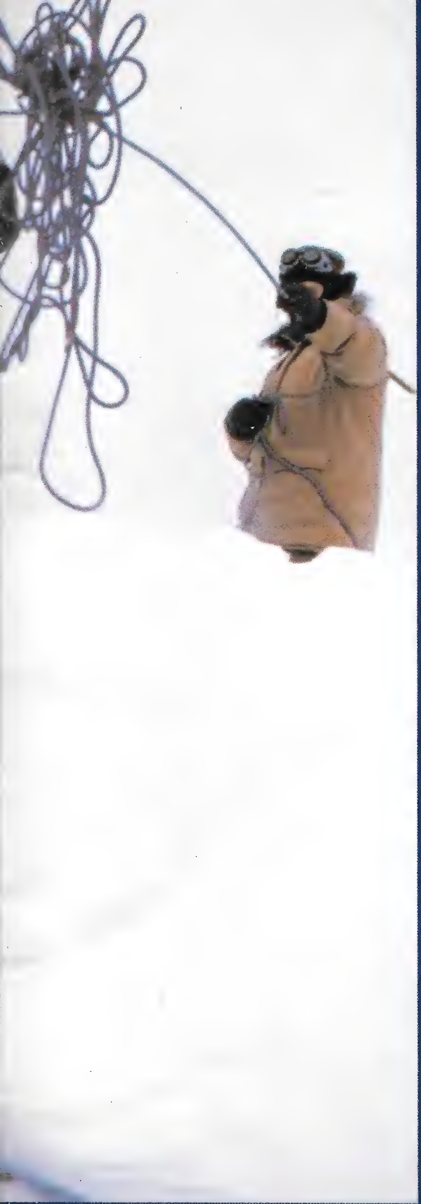


JOHN CAR

THE

TH





PENTER'S

ING





再映画化は楽し——「遊星からの物体X」

人類が永遠に抱きつづける夢——宇宙征服。ところが，こちらから行くだけでは興味未(いま)だし，宇宙からおいでになるもの，異星人(エイリアン)の訪客——といったおだやかなものもなかにはありますが——これら“侵略テーマ”と呼ばれるジャンルの映画も数多く作られるようになりました。

ハワード・ヒューズが実権を握っていたＲＫＯ，ハワード・ホークス製作の「遊星よりの物体Ｘ」（51年）は，この“侵略”の先駆者なのです。これに続いて，20世紀フォックスの大作「地球の静止する日」（51年）に，宇宙船を降りて巨大ロボットが，地球に歩を印しました。同社は，イギリス，ロンドン・フィルムのＳＦ大作「来るべき世界」（36年）のウィリアム・Ｃ・メンズィス監督を招いて，「惑星アドベンチャー／スペース・モンスター襲来」（53年４月）を発表しています。ユニヴァーサルは，立体映画で“それはほかの宇宙から来た”（リチャード・カールスン主演），ＵＡは，“宇宙よりの妖怪”（テッド・クーパー主演）を53年５月に公開。６月には，３Ｄ(スリーディ)映画社から，ロウ・マンという巨大な“ロボット怪物”（ジョージ・ネイダア主演）が地球の科学者を襲っています。10月，ジョージ・パルの第３回作「宇宙戦争」（53年）は，深海のえいのような宇宙艇と，それを運転してきた火星人の，なんとも奇怪な手が，当時，たいへん評判をよびました。54年の，20世紀フォックス映画“火星からの侵入者”（ヒラリイ・ブルック主演）はトンボのような大目玉の怪人。55年は，ちょっと下火でしたが，56年から“宇宙もの”ブームは，もう固定化したといえます。

こちらには入荷しなかったもの（“”題名の作品は未輸入）がゴマンとありました。

＊　　＊

ところで，この「遊星からの物体Ｘ」（82年）の監督ジョン・カーペンターが，“それはほかの宇宙から来た”を見たのは，５歳のときだそうです。ＳＦ映画の魅力にとりつかれて，その映画を見つづけてきたとか。映画を長く見つづけてきますと，再映画化作品というのに，ひどく興味をそそられます。

文芸名作，あるいは映画が大当たりした場合，早いときは，５年ぐらいで再映画化されますし，約10年を周期に映画化される，そういう作品もあります。例えば，1971年，「嵐が丘」をはじめ，「椿姫」「二都物語」「宝島」「夜間飛行」などの名作が，続々再映画化されると製作通信は伝えていたものです。しかし，再映画化が，目下の流行などというのは間違いで，再映画化は，いつでも絶えず行われているのです。製作通信で探してみれば，





児玉数夫

かならず発見されるでしょう。私たち映画ファンが，再映画化作品に強く惹かれるように，映画を作る側も，再映画化には意欲的です。

ジョン・カーペンターは，ハワード・ホークスの崇拝者です。ジョンの好きなＳＦ，Ｈ・Ｈ（ハワード・ホークス）のＳＦ映画といえば，「遊星よりの物体Ｘ」しかないのです。ジョンが，この30年ぶりの再映画化に，どれほど乗り気であったか，想像にかたくありません。しかし，大先輩ホークス作品のリメイク（再映画化）など，若輩の身におこがましい，“現代版”と呼んでほしい，といっているそうです。

なるほど，「遊星よりの物体Ｘ」（51年）と「遊星からの物体Ｘ」（82年）では，内容がちがいます。ただひとつの相似点は，再映画化する場合，ふつう大スタアを配役するのですが，新顔で，観客に期待をもたせる，という方法を採ることもあります。ジョンは，初作と同じ，ノー・スタア配役を採っています。

51年版は，The Thingとあって，小文字でfrom another worldと続いておりました。原作“Who Goes There?”（そこへ行くのは誰だ？）＝ウィリアム・キャムベル・JRを脚色したのはチャールス・レデラー。撮影は，西部劇が得意のラッセル・ハーラン，音楽はディミトリオ・ティオムキン。監督は，ホークスの「赤い河」（48年）の編集者（エディター）クリスチャン・ナイビイが選ばれて担当。

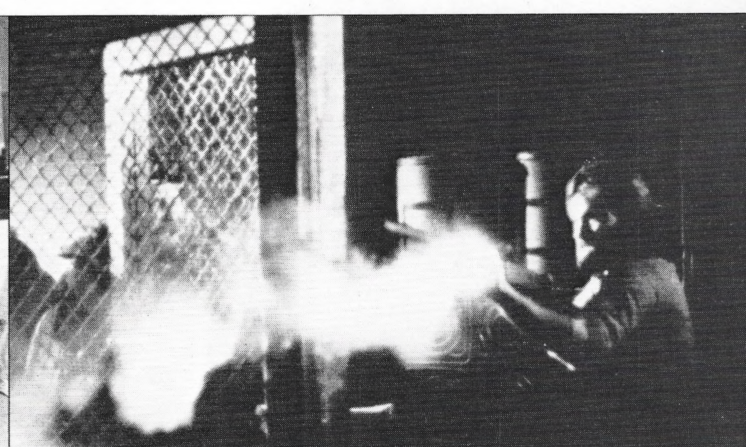
195？年（この？は，未来年次を指しているのでしょう）の11月。処は，北極地点とほど遠からぬところにある極地科学研究所。（82年版は，南極。ただし，ロケ地はアラスカ）。所長キャリントン博士（ロバート・コーンスウェイト扮）は，極地に航空機らしい物体が墜落したから，調査飛行機を派遣してくれるようアラスカ防衛軍司令部へ至急電報をうつ。ヘンドリイ大尉（ケネス・トビイ）は，Ｃ47を操縦し，吹雪をついて飛ぶ。大尉は心中，博士の秘書をしている恋人ニッキー（マーガレット・シェリダン）に会えるので喜んでいる。

映画は導入部分で，これだけ違うのです。ビル・ランカスター（御存知バート・Ｌ（ランカスター）の息子）の脚本は，女性なしです。そう，女性がいては，のべつ失神していなくてはならないようなショック・シーンを，82年版は用意したからでしょうか。51年版は，ラスト近くまで，物体Ｘはなンなのか，隊員も，私たち観客もわからないままでいて，動きだしたＸ，そのクライマックスでさえ，Ｘは何やら植物組織のモンスター，と見るうち，火に焼かれ滅びてしまいます。だが，ここへくるまでの運びに，映画はウェイトをおいていたのです。

82年版はどうでしょうか，いやこれは，もう特殊メイクのロブ・ボッティンです。筆舌につくしがたいというのはこのことでしょう。ハリウッド特撮陣は，やはり世界一であることを誇示して余りあるものがあります。

強烈にグロテスクです。でも，私は，南京大虐殺は静止写真でさえ正視にたえない想いですが，ロブ“Ｘ”に生理的嫌悪は憶えません。何故といって，これは映画（ムービー）の魔術（マジック）だからです。ジョン＝ロブのマジックに拍手をおくります。





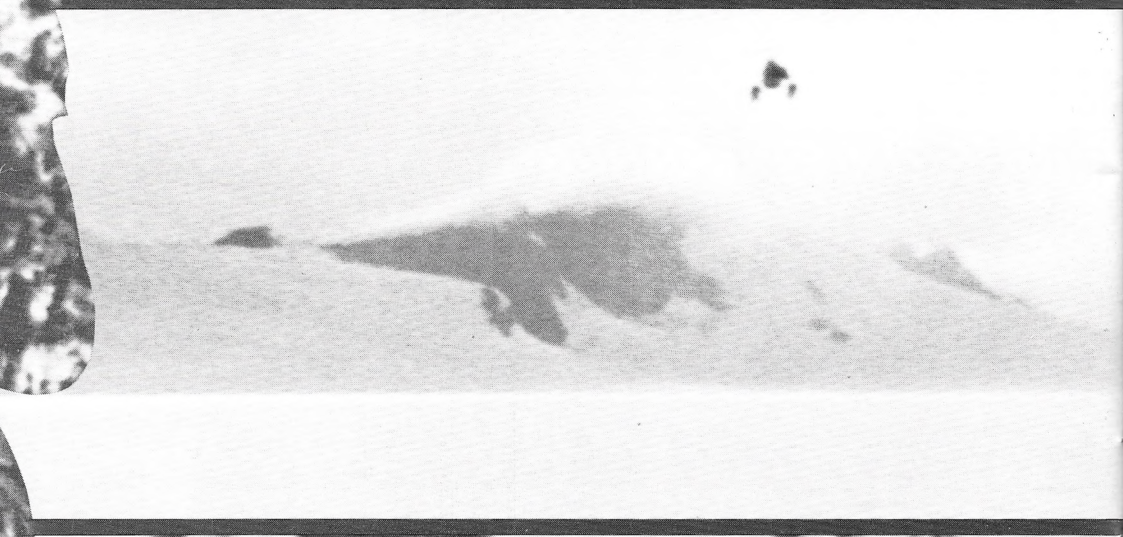
●いまから６年前，この作品の共同プロデューサーであるスチュアート・コーエンは，子供の頃夢中になって読んだＳＦ短編小説「影が行く」を突然思い出した。そして，それを捜し出して読み直した後，一つの結論に達した。すでに1951年に名匠ハワード・ホークスが一度映画化しているとはいえ，これを原作により忠実にアダプトすれば，現代にも充分通用する絶好のエンタテインメントになるのではないか，と。

コーエンは，デビッド・フォスターとローレンス・ターマンに共同製作の話を持ち込んだ。多忙なことでは類を見ない２人のプロデューサー・チームも原則的に同意，企画をユニヴァーサルが呑み，製作ＧＯとなった。

一方，ほとんど同時期に，ホークスのクラシックＳＦを，まったく別の角度から再映画しようと目論んでいた男がいた。ジョン・カーペンターだ。奇しくもコーエンとカーペンターは南カリフォルニア大学映画科の同級生。話はトントン拍子に進み，カーペンターが脚本をビル・ランカスターに依頼した79年の時点で，ターマン／フォスター，コーエン，カーペンター，ランカスターのチームが成立。1981年８月24日，製作費1,500万ドルのＡ級プロジェクトとして製作が開始された。

●撮影は12週間の予定で，先ずハリウッドのユニヴァーサル・スタジオ内でスタートした。外は真夏。連日37度







プロダクション・ノート

以上の日が続いていたが，６つのサウンド・ステージは，いずれも室温０度以下に保たれた。言うまでもなく南極という極寒の雰囲気を作り上げるためである。一方，ユニヴァーサル・ハートランドには第２班が設置され，メイン撮影が始まる前からロブ・ボッティン担当の特殊メイク，特殊効果の作業が極秘で進められていた。

さらに，アウトドア・シーンの背景としてアラスカのジュノー氷原にあるタク氷河と，カナダ・ブリティッシュ・コロンビアにある不凍港スチュアートが選ばれた。スチュアートはかつてゴールドラッシュでにぎわった古い町。最盛期は人口２万人近くにのぼったが，現在はわずか1,500人。そのため，町にあるすべてのホテル，モーテル，簡易宿泊所などは，この作品の米・加合同撮影隊によって占領されることになった。

●ハワード・ホークスの「遊星よりの物体Ｘ」が，未だ映画ファン，ＳＦファンの脳裏に熱く焼きついているにもかかわらず，カーペンターが敢えてリメークに乗り出した理由は，ホークスの映画化以上に，キャンベルの原作小説に深い愛着を抱いていたからだ。

「ホークスの作品は実に優れたものだと思う。しかし，原作をかなり改変していたことが引っ掛った」とカーペンターは言う。

キャンベルの創造した恐怖感は，その後，リドリー・スコットの「エイリアン」や，フィリップ・カウフマンの「ＳＦ／ボディ・スナッチャー」に受け継がれている。当然，カーペンターの「遊星からの物体Ｘ」は，それらと比較の対象になるわけだが，彼に言わせると，同じモンスター映画ということなら，比較大歓迎という。

●ホークス版に比して，よりキャンベルの原作に近づけるとはいっても，脚本のビル・ランカスターは，１から10まで原作に忠実にすることはないと考えた。ランカスターの脚本は多くの部分で原作とは趣きを異にしている。たとえば登場人物の数は，原作の37人から12人に減らされた。「37人はちょっと多過ぎる。各々に個性を持たせるのは大変だし，第一，観客がとまどってしまう」とランカスター。

構成上で最も斬新な改変はオープニングだろう。原作では気象学者マクレディが，氷原探査の途中で宇宙からの侵入者を発見した時のフラッシュバックから始まっている。

今回，ランカスターは，犬にとりこんだ“物体”を，ノルウェー隊の生き残りがヘリコプターで追跡するという極めて動的なシークエンスからスタートさせた。原作の中段を冒頭に持ってくるという大胆なものだが，後に展開される不安感，恐怖感の伏線として，まずは最上の効果を挙げている。





THE ULTIMATE IN ALIEN TERROR.



JOHN CARPENTER'S

THE THING

MAN IS THE WARMEST PLACE TO HIDE.

UNIVERSAL PICTURES